

2024 年度北陸支部活動開催報告

主 催：公益社団法人日本語教育学会
開 催 日：2025 年 1 月 25 日（土）13:30～16:00
会 場：オンライン開催
参加人数：20 名（会員 9 名、一般 8 名、関係者 3 名）

本活動のタイトルは「多文化共生の時代を迎えて ー外国人散在地域におけるエスニック・コミュニティと日本語教育の役割ー」でした。非会員の方や北陸以外の地域の方も参加してくださり、密度の濃い内容となりました。本活動は、事例報告、及び、全体討論という構成で行いました。

事例報告は、1) インドネシアセンター新潟 INDONESIA CENTER NIIGATA(ICN)日本語サポート事例（小島アムナ氏/インドネシアセンター新潟）、2) 異なる文化と地域をつなぐ Connecting Cultures and Communities（アロソ スティーブンソン氏/新潟フィリピン協会）、3) 新潟のイスラムコミュニティーノムスリムが多文化理解活動を通してイスラム文化を体得する（長坂康代氏/敬和学園大学）、という3つです。小島氏は、インドネシアから来日する人々の日本語学習サポートを長く続けており、ご自身の活動紹介、及び、新潟にインドネシア協会のようなコミュニティがない理由についてお話がありました。アロソ氏からは、新潟フィリピン協会を立ち上げた経緯、そして、フィリピン出身者だけでなく新潟県在住の外国人と日本人をつなぐ活動について紹介がありました。長坂氏は、新潟県内にあるモスクに集う人々とそのコミュニティを、半当事者としてかかわる立場から紹介、さらに、大学生が様々なコミュニティとの交流を通じて多文化理解を深める過程について、具体的な事例報告がありました。

全体討論では、地域に根差した日本語教育活動についての質問や、参加者からのコミュニティ事例報告などがありました。話し合いと並行してチャットでの意見交換が非常に活発に行われ、オンライン開催の意義を実感しました。

終了後のアンケートでは、報告で示された事例および全体討論が参加者にとって参考になったことが窺えるコメントが多く寄せられ、今回の企画の意義が感じられました。一方で、日本語教育に関する議論が十分に深まらなかった、という指摘もあり、課題として受け止めています。いただいたご意見を今後の活動につなげていきたいと思えます。

最後に、今回の支部活動にご参加くださった皆様、実施にご協力くださった方々に心より感謝申し上げます。

（報告者：支部活動委員（北陸） 木林理恵）